

第3話 蔵書は処分するためにある

本を買ふそばへ古本売りに来る 雉子郎

「雉子郎」とは、吉川英治が川柳を作るときの号。古本屋の風景だろう。古本屋で本を買っていると、すぐ脇で、古本を持ち込んで売る人がいる。こうして、本が世の中を対流して、古本の世界が作られていく。

本を売って、それがまた古本屋の本棚に並べば、また別の必要としている人の手にわたり、本が生き返る。本の処分はマイナスイメージがあるが、じつは本の役目を再生させる意味もある。そのことの意味は大きい。

とまあ、これは半分くらい、蔵書を処分する痛みをまぎらわすために、自分に言い聞かせる「呪文」のようなものでもあるのだが……。

本を買ってもらったのは「音羽館」

身を切るような蔵書処分をしたことは、前回に書いた。「欲しいものはどんどん持って行って」と知り合いの古本屋さんに頼んで、買い取りに来てもらったところ、大雑把な数字だが、文庫と単行本各 600 冊が我が家から出ていった。今回、許可を得たので公表するが、その古本屋さんとは、東京・杉並区の「古書 音羽館」である。

「音羽館」は中央線「西荻窪」から徒歩7、8分のところにあり、オープンして10年目くらい。二個一の店舗を間の壁を一部抜いた構造で、美術、演芸、映画、音楽、海外文学、デザイン、マンガ、絵本、日本文学、文庫、新書と守備範囲が広く、良書を揃える優良店である。その証拠に、いつ行っても店内に複数以上の客がいる。女性率が高いのも特徴で、四割という高水準。

店主の広瀬洋一さんは、古本業務のほかに、「西荻ブックマーク」と名づけられた、本に関わるイベント、トークショーも手がけている。私は、溜まった書評の新刊など、月に1度くらいは持ち込んで、高値で引き取ってもらっている。同じ量をブックオフへ持ち込んでも、おそらく音羽館で払ってもらっている額の3分の1にもならないと思われる。それほど買い取りが誠実なのだ。

広瀬さんとは無駄口を叩き合える仲のいい関係で、今回の買い取りも安心してまかせることができた。みんながそうはいかないだろうが、大切な蔵書を処分するとき、安心できる関係の業者を作っておくことも大切だ、と思う。

普通は、買い取りに来てもらった当日、車に積み込む前に評価額の代金をその場でもらうようになっている。しかし、今年に一度、2000冊近くを音羽館に売ったときもそうだったが、いったん店に持ち帰ってもらい、ゆっくり査定してもらうことにした。その場でもらうか、査定をじっくりしてもらうか、どちらがいいとは言えない。ケース・バイ・ケースだ。私と音羽館の関係を考えたら、後者の方がうまく行く気がしたのである。

2週間後ぐらい、連絡が来て、今回の蔵書の評価額が告げられた。40万円だった。これは、相当に高い評価だと思われる。1200冊が40万円なら、1冊300円強。文庫が半分混じっていたから、普通なら考えられないような数字である。おそらく、同業者の古本屋さんがこのを読んだら、目を剥くような買い取り価格だと思われる。1200冊を引き取って1万円を払えない場合だってあるだろうから。その理由はあとで説明する。

とにかく、お金が必要なことがあったので、この40万円は本当に助かった。

広瀬洋一さんに聞く買い取りの話

さすが音羽館、とうなるほど、あとで抜かれていった本棚を見て、しばし茫然となったことは前回に書いた。あまりにいい本が消えていったので、やっぱりショックだったのだ。しかし、数日たてば、もう何もなかったかのように日々が流れて行くのだった。想像したよりはるかに、後遺症はなかった。むしろ、1200冊を処分して、床に積み上げられた本が一向に減らないので、うんざりしたほどだ。

12月某日、あらためて広瀬くんに、今回の岡崎家の場合と、買い取り全般の話聞いてみた。まずは、私が「欲しいものだけ持って行ってくれ」と告げたこと。これは古本屋側にとっては、都合のいい申し出のはずだったが、本当のところどうだったんだろう。広瀬くんは少し考え、「いや、それはそうなんです、正直、ちょっと戸惑いました」と答えた。通常、本を買い取りに行く場合、向うから出される条件は、大体3つに分かれる。

- 一、部屋にある本は全部、持って行ってくれ
- 二、あらかじめ所有者が選び出した本を買う
- 三、店で売れないもの、値がつかないものは置いて行ってくれ

ここから派生するバージョンもあるが、おそらくこの3つに絞られる。

音羽館は、1日に数軒こなすこともあるから、平均して週に5軒ぐらいの買い取りに行くそうだが、それでも過去に、私のようなケースはあまりなかったらしい。

「うちの店に欲しい本だけ、というのはありがたい話なんです、岡崎さんの仕事のこともわかっているし、ほんとうに好きなだけ持って行っていいの、というためらいが、最初にあったんです」

というのが「とまどい」の理由。少し作業が進むと、はずみがつくらしく、どんどん本棚から抜いていったようだが。

「まず目についたのが私小説系作家の本ですね。上林暁、木山捷平、尾崎一雄、それに小沼丹。小沼丹など、いま人気で売れるところですが、めったに買い取りがない。永井龍夫や山田稔といったシブい作家も抜きました。川本三郎さん、海野弘さんは、ネットなどを見ると、それほど高くはついてませんが、うちの店では確実に売れる作家です。あとは、文庫ですね。じつは、いま良質の文庫の買い取りが本当に減ってしまっていて、市場でも高い。講談社文芸文庫があんなに揃っているのは、買い取りでは見たことがないですし、中公文庫やちくま文庫も、いいものを買わせてもらいました」

音羽館には、持ち込みでちくま学芸文庫を50冊ぐらい、まとめて売ったことがあるが、このときも1冊、300～400円の値をつけてもらった憶えがある。一般の小説文庫だと、1冊100円もつかないのがほとんどのはずで、これも法外の評価だろう。

買い取りの裏側に迫る

次に買い取り一般の話を聞いてみた。

音羽館は買い取りに積極的な店で、段ボール2箱、場合によっては1箱から売り先まで出張する。買い取りが集中するのは、やはり春先。2月の後半から4月までが、引越しのシーズンで、ゴールデン・ウィークあたりまで、本の処分に来てほしいという依頼がある。「かつては年末の大掃除時期にも、けっこう集中しましたが、いまはそうでもないですね」とのこと。みんな忙しくなって、大掛かりな大掃除をやらなくなったか。

音羽館の使っている車は普通車のバンで、うしろの荷台に、段ボールで約80箱、単行本でいえば約1500から1600冊が積める。ほとんどが、このキャパで用は済む。

杉並区内なら、だいたい問題ないが、神奈川、埼玉、千葉など遠出することもあり、その場合は、スケジュールが組まれ、買い取り値から出張費が引かれることもある。

つまり、出張買い取りで客に支払われるお金は、純粹に売った本の代価というわけではない。遠くまで行けば、ガソリン代がかかるし、人を使えば人件費、それが時間で加算される。また、エレベーターなしのアパート、マンションの4階や5階となると、その荷出しの苦勞は半端ではなく、労働に対する対価として本の売値から多少なりとも差し引かれることになる。

売る側の心得としては、出張買い取りの依頼をするとき、どんな本が、どれだけの量があるかを、できるだけはっきり告げること。

「電話で、例えば100冊位と聞いて、じっさい行ってみたらそれより多いことがよくあるんです。100冊から200冊と言われて、じつはその10倍なんてことも珍しくない。仕方ないと言えばそうですが、普通の人だと、目で見て、だいたい本の冊数がどれぐらいある

のかが、よくわからないみたいですね」

一つの目安は、もっともポピュラーな5段のスチール本棚で、普通の単行本がほしい180冊くらい収納されている。ミカン箱くらいの段ボールだと、50冊は入らなくて、40冊くらい。床に積み上げている場合なら、一つのブロックがどれくらいあるか数えてみて、あとはかけ算するといい。

古本屋さんが使う車のキャパは決っているから、数軒はしごして買い取りに回ろうと計画を立てている場合、冊数が大幅に狂うと段取りが変わってくる。

揃えた本が同じでも、支払われるお金が違う場合もある。

「どうしてもお金が必要で、大事にしていた本を得るというお客さんの場合、やっぱり気合いが入っていて、高く買ってあげないと、と思いますし、逆に、お金のことはいいから、とにかくどんどん持って行ってください、と言われると、こちらもその心づもりで評価することになります」

なかには、床に本を並べて、主人が1冊1冊「これはどうだ、いくらつく」と、個々に値段を聞かれることもある。もちろん、古本屋さんとすれば、それに答えられるだけの体制を整えることは必要かもしれないが、やっぱりちょっと腰が引けてしまう。実際、1冊1冊の値段を決められない場合もあるのだ。

「こういうケースがあるんです。例えば、10箱売ってもらうとして、正直言って引き取れるのはそのうち2箱しかない。その2箱だけいただけるなら1万円払いますが、全部引き取れということなら、値段はその半分になりますよ、と説明することがある」

2箱で1万円で、10箱なら5000円、というのは、ちょっと聞くと不思議な話だ。つまり、要らない8箱は、お金を払って処分業者に引き取ってもらうことになる。その手間と処分代がそこから差し引かれるわけだ。

客との駆け引き、客との時間

じっさい、主人が亡くなったあとの蔵書の山は、残された遺族にとって暴力的な存在で、処分代を払ってでも、引き取ってもらいたいと思うだろう。

これは別の古本屋さんから聞いた話だが、やはりご主人が亡くなった後の蔵書の処分に出かけた時のこと。本を縛り終わって査定して、「全部で8000円ですが、よろしいでしょうか」と告げると、未亡人は「あらそうですか、ちょっと待ってください、じゃあ財布を」と、8000円払おうとした、というのだ。あわてて、古本屋さんは「いえいえ、こちらからお支払いするんです」とそれを制した。この奥さん、てっきり古本の処分代として、お金をこちらから支払うものだと思ったのだ。

「買い取りに行って、イヤな思いをすることもあります。それでも、本を揃えて、ヒモで縛っているうちに、だんだん気持ちが変わってくるんですね。お客さんの立場になる、と

「うか、一緒にいる時間が長くなると、それだけ情が移っていくというのかなあ。とにかく、得難い経験をしているという気持ちはありますね」

と広瀬くんは言う。

蔵書の処分には、処分した人の数の分だけ、さまざまな事情とドラマがある。やむをえず、大事にしていた本を経済的理由で手放す人。故郷へ帰るために処分する人。離婚して、残していった妻の本を売る人。

「旅と似ている、と思うことがあるんです。よく言うでしょう、旅にはトラブルがつきもので、平穩無事に行ったときより、何かあったときの旅のほうが印象深いつて。本の買い取りも、他人の家に上がり込んで、それもほとんど一回きりの出逢いで、本の処分に立ち会うわけですから、これはやり甲斐のある仕事だと思うんです」

話を聞いていて、広瀬さんって本当にいい人だなあ、と思えてきた。

「本を買ふそばへ古本売りに来る」の川柳ではないが、売り買いを通じて、お客と店主が過ごす時間を、広瀬さんは大事にしている。

なかには、安く本を買いたたいて、店では高く売って、ひどい商売だと思っている人もいるかもしれない。実際に、面と向ってそう言われることもあると聞いた。

しかし、古本屋さんの味方である私としては、出久根達郎さんのこんな言葉を思い出すのだ。「漱石を売る」という文章に「古本屋は商売下手なんですよ」とある。あとにこう続く。「自分が、でなく、みんながそのような気がするのである」。

音羽館が商売に誠実なのは、買い取りの軒数が多いことでもわかるのだ。

蔵書を手放すことが本人である場合、いかなる時でも後悔と痛みは伴う。それを買い取る古本屋さんは、もちろんビジネスではあるが、それだけとも言えない。一種の共犯関係ともいうべき、空気がそこに流れるのである。

ある古本屋さんのブログより

福岡市で、各種即売会とネット販売だけで経営されている古本屋さんが、ホームページで書き続けておられる「古本屋日記」がおもしろい。「なにかと嫌われ者の団塊世代です」と、タイトルわきに振られていて、まずクスリとさせられる。本を売り買いする日々のこと、ファンである福岡ダイエーホークスのことなどが、ボヤキ混じりでユーモラスに綴られていて読ませる。ここでは、許可を得て、過去半年分くらいから、蔵書の買い取りのところだけ、ちょっと紹介してみる。

6月12日。買い取りに出かけたが「20年前くらいの一般書がほとんど。保存もいまいち。しかし、対応していただいたおかあさんが感じのいい方で、一瞬思考停止、お断りするタイミングを外してしまった。商売人失格だ」とある。ほら、言ったでしょう。出久根さんが言う通り、「古本屋は商売が下手」なんだ。

7月3日は、なんと店に、朝8時40分に買い取りの電話があった。「9時半に出かけなければならないので、それまでに」来てくれとのこと。普通なら別の日にと、言うところだが「絵本があります」の甘い言葉と、聞き覚えのある声に、超特急で支度をして駆けつけた。行くと、やっぱり顔見知りの常連さん。電話で「50冊以上はある」とのことだったが、段ボール箱に詰めてみると六箱になった。もちろん、おいしい買い物なのである。「本を全部積み終わったのが9時28分」と、約束の「9時半」に間に合った。しぶい！

素人は、本の冊数を把握できない、という話が12月15日にも。近くの大学の研究棟へ出向く。台車に段ボールを積み上げて行くと、「そんなにいらないよー、今度はちょっとだけだよ」と先生が言う。しかし、追加、追加で本が増え、箱が足りなくなってきた。

8月20日。約束の10時に電話で教わった住所に来てみたら、見当たらない。狐に化かされたような話で、さんざん周囲を探したが、とうとうわからず帰ってきた。住所の最後に「701」とあるので、マンションらしいが、かんじんのマンション名が書いていない。客からあとでメールがあり、この日は朝から出かけてしまって、もし見つかっても買い取りはできなかった。「空振り」は慣れている、と、その古本屋さんは言う。

9月8日。ビルに入った事務所へ。ベストセラーなど200冊、というので期待せずに行ったら、デザインや美術の雑誌が山のようにある。「即売会向き」だと喜んでいたら、「じゃあ、ついでにコミックも」と出てきたのが、手塚、星野、諸星と人気どころ。これが千冊。思いがけない買い取りとなった。

同日。葬儀の席へ出かけての買い取り。正直、気が重い。本は理系の参考書や教科書など、約2500冊。これは商売にならず、「捨てる本もかなりある」と告げたら、仏の弟さんが言った。「いる本だけ持って行ってください。必要な人に渡していただければ、兄も喜びます」。買い取りにはさまざまなドラマがあり、ときに古本の役割を気づかせてくれるのだ。

9月19日には、駅前通りのマンションへ。路上駐車して台車で向うが気が気じゃない。こうして数年に一度、駐車違反キップを切られるのだという。その違反金は、誰が払ってくれるわけでもない。そういう苦勞もつきまとうのだ。

11月17日。「コミックは扱わないと決めているのに、欲に目が眩んでしまって」と前置きし、「亡くなったおじさんの古~いマンガ、1000冊以上あります」という家へ。ところが、「古~いマンガ」とは、せいぜい20~30年前のもの。「おまけにホコリもあり1冊も買えずに帰る」。この「古~い」というのがくせ者で、20代、30代の者からすれば、自分が生まれた頃、あるいは子ども時代に出た本ならじゅうぶんに「古~い」。しかし、「少年ジャンプ」400万部というようなコミック大量消費時代に入った以降のマンガは、よほどのものでないと値がつかない。「亡くなったおじさん」「古~い」ということばだけでは判断が難しい。

そのブログには、古本屋と客とのやりとりが正直に書かれているので、売る側にとっても参考になりそうだ。